

67.3%の症例に残存していた。全例職場復帰していた(平均1.6カ月)スポーツ復帰は51.3%と低調であり、復帰時期もばらつきを認めた。85.4%の症例は手術に満足していた。装具治療例で足関節ROMは術後3~6カ月で健側とほぼ同様に改善していたが、下腿周径差は術後1年経過しても残存していた。

II-J7-5 足関節機能的不安定性に対する皮膚感覚刺激を用いた固有受容器反射促通訓練の有効性

長崎大医療短大 松坂 誠應

国療長崎病院リハ科 藤田 雅章

【目的】 Ankle disk 等を用いた固有受容器反射促通訓練に皮膚感覚刺激を併用した訓練の有効性を明らかにする。

【対象・方法】 対象は陳旧性足関節捻挫でFIの症状を有する20例20関節(平均年齢22歳)である。訓練として高さ7cmのankle disc上に10分間(5回/週)患肢で片脚起立させた。対象を無作為に2群

に分け、1群(10例)には片脚起立時の足関節内・外がえしの動きが外果部の皮膚感覚を刺激するように足底から下腿中下1/4まで外果前・後縁に幅1cmの非伸縮性テープを貼付(テープ貼付群)し、他群(10例)にはテープを貼付せず(非貼付群)、10週間訓練を行った。FIの定量的評価として重心動揺計上に30秒片脚起立させた時の重心動揺矩形面積(REC)を求め、訓練前と訓練後10週まで1週毎に重心動揺を計測した。正常群として正常成人(平均年齢23歳)26名52関節を用いた。

【結果・考察】 訓練前のRECはテープ貼付群($15.9 \pm 4.3 \text{ cm}^2$)と非貼付群($16.9 \pm 4.5 \text{ cm}^2$)で有意差がなく、2群とも正常群($9.6 \pm 1.7 \text{ cm}^2$)より有意に大きかった。テープ貼付群のRECは訓練4週後($11.1 \pm 2.5 \text{ cm}^2$)で訓練前より有意に小さくなり、6週($8.7 \pm 1.4 \text{ cm}^2$)で正常群と有意差がなくなかった。非貼付群では6週($11.7 \pm 2.5 \text{ cm}^2$)で訓練前より有意に小さくなり、10週後($9.6 \pm 1.8 \text{ cm}^2$)で正常範囲となった。従って、外果部の皮膚感覚刺激を併用した訓練は従来の訓練の効果発現を早めることができる。

▶▶次号予告

VOL. 36 NO. 12 ◀◀

第36回 日本リハビリテーション医学会 学術集会 一般演題抄録 (その2)

編集の都合上内容が若干異なる場合がありますのでご了承下さい。